



～ちょこっとメモ～

先生たちは、夏休みに、日頃できない、様々な研修を受けています。今回は、荒川が勉強した中で、1番気になったことを報告しますね。

「ゲーム障害の理解と対応」 8/19 熊本市内養護教諭部会にて

講師：徳島県 藍里病院 副院長 吉田精次先生

はじめに・・・

ゲーム依存には「ゲーム障害」という「病名」が付きまして。確かにひどい依存症の場合、「治療」が必要です。「病気」というと、本人を治療すれば治るというイメージですね。でも「依存症」に関しては、そんな簡単なものではありません。

他の依存症（飲酒・ギャンブルなど）も同じですが、その人の背景にあるものを探り、なぜ依存するようになったのか？を知ることが治療につながる第一歩になります。どの症例にも、必ず「理由」が隠れていることが多いんです。

スマホなどからの情報、何がいけないのか？

- ・ 様々な情報というけれど⇒実は、自分の好む、かたよった情報しか得ていない。
- ・ 検索ツールなどの便利さのあまり⇒工夫する・創造するなどの力が欠如していく。
- ・ 求めるのは答えまでの「経過」ではなく「結果」だけ。ひまは苦痛でしかない。
- ・ 言語能力、解決能力も低下し、いじめやヘイトなどの攻撃性が強くなる。
- ・ 集中力の低下・・・やがてヒトは、金魚よりも集中力が無くなるだろう。

人の脳と心の発達：暴走する観念(心)を、身体が制御する。

⇒心は「仮想空間」で、どんどん暴走する事ができる。それを現実に引き戻し、セーブをかけるのは、身体。体験に基づいて身体が脳に「現実」を教える。

{例} 空を飛べる気がする！ ⇒ ヒトはそのままで空は飛べない！



心

飛んでみよう！

飛んではだめだ！

身体



タイのテレビCM

～ タイでも深刻な社会問題 ～

赤ちゃんには、大人が繰り返し教える事が大事。携帯片手に子育てはできない。ヒトの原点を大事にしよう。赤ちゃんにあなたは大事な存在だと伝えよう。見つめあおう。

☆次回は、「依存症になったときの治療」について、実際の藍里病院での取り組みについて書きます。